



TITLE:

# 実践型地域研究ニュースレター：ざ いちのち No.27

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア  
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた  
めの実践型地域研究

---

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会  
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニュースレター：ざいちのち No.27. 実践  
型地域研究ニュースレター：ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147112>

RIGHT:

## ざいちのち

まちやむら、そこに住む人ひと（＝ざいち）の、  
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニュースレター No. 27 2011 年 1 月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市椋川

## 亀岡フィールドステーション

### 杣人たち ―京北町と保津町の林業従事者を訪ねて―

亀岡 FS 研究員 河原林洋

昨年より、京都市右京区京北町や亀岡市保津町の杣人<sup>[1]</sup>と呼ばれる伐採から搬出までを経験された林業従事者から、主に昭和 20～40 年代の山仕事について聞き取りを行っている。ここでは京北町の田中利一氏と保津町の植村耕太郎氏を簡単に紹介する。

田中氏は、大正 12 年、現在の京都市右京区京北大野町生まれである。高等小学校卒業後、京都・西大路三条にある材木屋に丁稚奉公に出た。昭和 16 年に海軍に志願し、同年の真珠湾攻撃に従軍、各地を転戦し、舞鶴で終戦を迎える。戦後、京北町に帰り本格的に林業従事者となる。



写真：下刈用の鎌を持つ田中利一氏

農繁期を除いては、春は植林、雪起こし<sup>[2]</sup>、杉つり<sup>[3]</sup>、夏は杉や檜の伐採、下刈、秋は木馬曳き（木材搬出）、冬は、松切り、松出し<sup>[4]</sup>、柴・割木作りとほぼ一年中林業に従事していた。昭和 50 年代までは林業も盛況であったという。詳細については紙面の都合上割愛する。

林業に従事する中で、田畑や約 10 町の山を所有するにいたるなど、林業で生計を立ててきた。だからこそ、今の林業の状況を憂いている。持ち山に最後に植林したのが約 30 年前で、出荷適齢期の木材が山に眠っている。出荷したいが、その後の植林まで資金と体力が残らない。持ち山だからこそ「禿山」にはしたくない。京北の街道から山々を見渡すと緑豊かに見えるが、谷間や山裏へいくと禿山が多いとい

う。田中氏曰く「山の砂漠化」が進んでいるのである。山仕事を自分の天職であると称し、今ある財産は山からのいただきものと考えている氏にとって、今の状況は見るに忍びない状況であろう。今でも間伐材で薪を作り風呂を焚くなど、山とともに生活を送っている。

植村氏は、昭和 11 年、亀岡市保津町生まれである。代々保津川下りの船頭業に従事する家系であり、昨年、59 年間の船頭生活を終えた。昭和 30 年初めより船頭業・農業・林業を兼業し、保津、篠、水尾、京都各所で林業に従事した。

以前紹介した保津町の元筏士・酒井氏、上田氏の親方・渡邊正夫氏の下で、下刈・植林・木馬曳きに従事したこともあり、酒井氏らの筏に数回乗ったこともあるという。昭和 20 年代に保津峡より上流からの筏流しは途絶えたが、昭和 30 年代、保津峡においては、筏流しが不可欠な輸送方法であったことが伺える。

保津川（桂川）の筏流しの実態を研究するなかで、伐採等の山仕事を知ることは必要不可欠な要素である。今後も杣人と呼ばれた林業従事者からの聞き取りを通じて昭和 20～40 年代の彼らの生活、そこにある先人の知恵を探っていきたい。

#### 脚注

- [1] 杣とは木材の茂る山のことであり、そこから転じて林業従事者を杣や杣人と呼ぶ。保津の元筏士らは、林業従事者を杣が訛った「ソーマ」と呼んでいる。
- [2] 雪で倒木した苗木を起こす作業。植林後約 10 年間続ける。
- [3] 植林後風雨で倒木しないよう苗木と台木（切り株など）とをわら縄で繋ぎ固定する作業。わら縄は風雨で朽ちてくるため、冬季には雪の重みで切れる。木々の成長期に合わせ夏季には固定し、冬季には雪の重みで木が曲がらないよう倒木もよしとした。山仕事の知恵である。
- [4] 主に近くの松山が現場。伐採した松は木馬か、「雪出し」といって雪が残る午前中に雪の上を曳いてふもとまで搬出した。

## 取り池と池仲間

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

開発集落(以降、在所と記す)の人々は、かつて、水田や川で「漁師」を楽しんでいた。獲れた魚は、そのまま食卓にのぼることもあれば、「池」で生かして飼うこともあった。「池」とは、同集落において、1970年代まで、豊かな野洲川の湧水や伏流水を生活用水として使っていた「池」である。だが、住民が「池」と語るのは総称であり、実際は「池」には様々な形態と用途がある。ここでは、取り池と池仲間について述べてい

たい。在所の飲料水は、本ニュースレター第4号で触れたように野洲川の湧水を利用し、竹の配水管によって各家に配水されていた。1930年代、在所では堤防の外側の下の湧水を溜める9つの親池があった。堤防に生えている青竹と松を利用して配水管を作り、親池から湧水を数100メートルほど離れた各家の取り池に送っていた。竹の管(直径約10cm、長さ約4m)は松の木の四角いジョイントでつなぐれ、洪水によって流されないように深さ約1mの地下に埋められた。1960年代、在所に上水道が設置されたため、竹の管による配水は廃止された。

### 取り池

1930年代、82(1神社、81世帯)の取り池があった。取り池は竹の配水管で送られた水を貯えて釣瓶でくみ上げていた。だが、現在、取り池のほとんどが埋められ、消失している。現在、蓋をして使われていない取り池は3つであった。取り池の所有者の協力を得て、池に溜まった泥水をかい出し、内部を調べた。取り池は深さ1.6m、直径90cm(内側74cm)の円形であり、高さ60cmの杉の木の樽が底にはめられていた。樽には竹の配水管が接続しており、泥水をかい出した後、透明な湧水が流れてきたことから、地中の青竹の配水管は腐らずに存在していることが確認できた。

### 池仲間

1930年頃、在所には9つの池仲間があり、上に触れた9つの親池から各池仲間に配水していた。池仲間は、近隣の約10戸が1つの組になり、竹の配水管からさらに竹の管の支線をだして各家の取り池に給水していた。配水管に使う竹や松の伐採から竹の配水管の設置、修理は池仲間の組が総出で行った。K氏(80歳)のお宅の資料を調べた際、1905

年(明治38年)7月に描かれた第3組の池仲間の絵図が出てきた。絵図は縦70cm、横1mの和紙に墨で描かれ、親池から12の池仲間の取り池(12個所)をつなぐ竹の配水管(46本)と松の木のジョイント(33個)の位置を示している。

この絵図には付記として、「飲用水として使われている水管は1882年(明治15年)に全部掘り返して修繕し、1905年6月にも修復した」と書かれている。

竹の配水管の修繕は「池なおし」と言われていた。この絵図の付記によって、高齢者が伝え聞いていた約20年に一度行われた「池なおし」について確認ができた。少なくとも在所における竹の配水管による飲料水の供給は、1882年から1960年代まで78年間行われたことが分かる。20年に一度、「池なおし」が行われたのであれば、1882年(明治15年)の「池なおし」の20年前である1862年(文久2年)頃には、竹の配水管を利用していたと考えられる。よって、在所では、この竹の配水管による飲料水の供給は、約100年間継続していたと推測できる。

池仲間8組のH氏(83歳)から、上部が三角形をし、下部が長方形の形をした木札(縦15cm、横23cm)が提供された。これには、「池仲間」と墨で書かれ、その下に6名の池仲間の世帯主の名前が記されている。日付は1908年(明治41年)4月と書かれてある。H氏によると「池なおし」の当番を割りあてる札だという。当番の世帯は、親池や竹の配水管の状態などを管理して、修繕が必要な場合には、池仲間に呼びかけていたという。

H氏は竹の配水管を使ってきた先人の知恵に驚かされたと語る。戦後、竹の管の代わりにヒューム管を利用したことがあったが、取り池に水が流れてこなかった。親池からポンプで圧力をかけて送水していなかったため、つなぎ目がきっちりしているヒューム管には空気が全く入らず、水が流れなかった。だが、竹の配水管には適度に空気が入るので、水が順調に流れるのだという。

在所の80歳代から90歳代の方々に、松のジョイント



写真:過去の記憶をたどり、竹の排水管の復元について話し合う。右端はジョイントにする松の丸太。

でつないだ青竹の配水管を復元していただいたり、貴重な資料を提供していただいたり、1930年代の池仲間と竹の配水管の地図の作成に夜遅くまで協力をしていただいた。この場をかりてお礼を申しあげたい。



### 山野の火入りを平場に生かす ―ハタケとネコブ(その1)―

朽木 FS 研究員 今北哲也

紅かぶらを播かなくなって 20 年余りも経っていた。「播かなくなった」のではなく「播けなくなった」のである。

一昨年、久しぶりに作付けを再開した。余呉の火入れがきっかけだった。

紅かぶらを初めて播いたのは 30 年ほど前のことだ。地元の在来種である万木かぶらを播いていた。そのうち畑がおもしろくなり、安全な食べ物を求める消費者と有機農業を目指す生産者との提携組織の会員となって出荷用に作付けするようになった。

何年かするうちに前作は枝豆とスイートコーン、秋の後作が大根と紅かぶらを作りまわすという形に辿りついた。冬が早くやってくる朽木・針畑谷で年 2 作はいっぱいいっぱいのローテーションであった。スイートコーン収穫あとの茎葉を刈り払い機で 3 段程度に水平伐りし鋤きこんだ畑に紅かぶらや大根を点播した。盆あとの収穫から種まきの盃蘭盆ころまで、せわしない毎日だった。種を落とした畝に贅沢に籾殻燐炭を被せた。畝間はスイートコーンの茎葉を落とした。踏み固まりにくく排水にもよいだろう、と期待した。枝豆は早生種と中生種で収穫ピークをずらしていたので後半の収穫は 9 月 10 日過ぎだ。専らこの畑が 9 月お彼岸頃から 10 月初めの移植かぶらで埋まった。暖冬だとかぶらが年内に玉太りし、慌てることもあったが、たいていは冬を越しての春先出荷用になってくれて先方でも野菜が切れる時期にあたり喜ばれた。



写真 1：収穫前の紅かぶら畑

「移しかえてやると、しなこうて（繊維っぽくなく）味がようなるさけえ」と、村のばあさんは言う。雪解けの季節に生野菜が穫れるのは大変ありがたい。ばあさんにしてみれば、少し玉太りして食べきれない間引き菜を空いた畑の隅に突っ込んでおこうと考え付くのは極々自然な行為である。

2～3 メートルの雪下で少しづつ太っていくかぶらは雪室貯蔵の米やりんごのように味がのっていくんだろうか。一般的に植物は寒さに遭うと細胞の液糖度が増して組織の凍死を回避しようとするということが知られている。白菜でも葱でも冬場のものはおいしい。葱の筒中のドロツとした粘液状のものも目立ってくる。

つくづく雪下かぶらはエライやっちゃん～！とおもう。雪がなければ冬越しであっても春までもたずに収穫しないといけなくなるだろうし、味ものではないのかと想像する。雪のあるなしと味との関係を実際に畑で確かめようと考えている。

すでに記したローテーションを 10 年余り続けているうちに土壌病害に見舞われた。根こぶ病である。若い苗の時期に葉っぱが萎れそのうち黄変して枯死に至る。生長をつづけられたかぶらも引っこ抜いてみるとキモチの悪いこぶができていた。農業試験場に走り相談した。大変厄介な難防除土壌病害の筆頭格だと知らされた。髑髏マークのクロールピクリンか石灰窒素の酸度矯正か。いずれも施用する気になれない。以後、紅かぶらは断念することになる。



写真 2：洗った紅かぶ（F1 品種）を干す

■第31回 定例研究会

1. 日時：平成23年1月28日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：近藤紀章（滋賀県立大学 地域づくり教育研

ラオス活動報告5 タチャンパ村ワークショップー  
生存基盤科学研究ユニット 矢嶋吉司

昨年6月に完成式を行ったタチャンパ村文化資料館は、村人たちが利用を始めて半年あまりが経過しました。建物管理や文化資料館の活用・維持管理について、2011年1月8日、タチャンパ村文化資料館でワークショップが開催されました。

村からは29世帯34名（男性26名、女性8名）が参加しました。村長をはじめとする村役が中心となって参加者を選びました。村長、副村長、ユニットと呼ばれる10～15世帯から構成される「町内会」の会長、婦人同盟関係者、青年組織代表などに加え、少数民族や参加者の年齢なども考慮されていました（表1）。当日、農学部からは6名の先生と5名の学生（男子3名、女子2名）、矢嶋が参加して、ワークショップの進行を手伝いました。

表1 参加者の内訳

参加者（世帯）	34名（29世帯）、5世帯から夫婦または親子など複数出席
年齢（人数）	60歳代(1)、50歳代(14)、40歳代(12)、30歳代(3)、20歳代(4)
民族（人数）	タイダム(18)、ラオルム(8)、ムン(3)、プーアン(2)、モ(1)、モ(1)、タイン(1)

まず、文化資料館の①利用目的、②維持方法、③運営管理、について村人たちの考えを聞きました。これまでの打合せでは、村役など数人の発言が目立ち、他の人はもっぱら聞き役になることが多かったため、今回は参加者全員に回答用紙を配り、それぞれの意見と名前を記入し提出してもらいました。

「利用目的」の回答は、表2のように6項目に分類できました。「文化資料館」の項目には、文化の保存、道具・資料の収集展示などの提案がありました。そのほか、小学校の授業への道具の活用(教育)、村の事務所や集会場(公共活動)、ツーリズム(開発発展)などの回答がありました。「その他」では、少数民族のタイダム（黒タイ）族やカム族は民族のために、ラオルム(低地ラオ族)は村のために、それぞれ重要であると回答が分かれたのが特徴的でした。ラオルムの人たちは、自分たちが何族に属していたのか、今ではわからないことも関係ありそうです。

次に、維持・運営管理について話し合った結果、建物清掃や道具の修理が必要で、掃除グループ結成や修理や収集する道具などを決める責任者が必要

究センター 特任研究員)

4. 発表内容：「いくつもの湖北をめざしてー湖北地域における移住・交流のとりくみー」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

表2 文化資料館の利用目的

項目	優先度		
	I	II	III
文化資料館	14	18	16
教育	7	5	8
村の公共活動	4	4	4
行事	3	5	3
開発発展	1	3	4
その他	7	0	0
Total	36	35	35

だという意見にまとまりました。

また、午後からは、参加者が3グループに分かれ、村の年間行事や仕事暦を、1月から12月まで月毎にまとめ、最後に各グループの代表者が報告しました(写真)。

途中、回収した回答を分類しまとめる間の時間を使って、参加者に子どものころの遊びを思い出してもらいました。それぞれの言葉で答えが出されたため、農学部の先生(ラオルム)が知らないことが多くありました。後で、聞き取り調査をして記録しようということになりました。

タチャンパ村には、村人によると現在7民族が暮らしており、互いに知らないことも多くあるのですが、村で文化資料館の活動が始まって以来、他の民族の文化、道具について関心が生まれています。また、私と一緒に活動している農学部の先生たちにとっても、村人が中心となったワークショップは初めてだったということで、よい経験になりました。ワークショップの結果は、今は、農学部の先生たちがとりまとめ、タチャンパ村の活動に還元されています。

朝9時半から午後5時ころまで、途中帰る人もほとんどなく、村人たちは最後まで熱心にワークショップに参加しました。この熱意には、手伝っていた学生たちも驚いていました。



写真：村人による結果の発表